

チェリー・イングラム 日本の桜を救ったイギリス人

阿部菜穂子著 (岩波書店・2484円)

桜の美をどこに求めるか。同じ形の花びらが一斉に咲きかたつ散るソメイヨシノの潔さか。色も形も花期も違うヤマザクラの多様な躍動感か。

現代日本人なら、桜と言えば前者をイメージしようが、実はそれとは150年の歴史にすぎず、古来桜は10の野生種と400以上の栽培種からなる花木であった。

この書は、その桜の本来の姿を日本人以上に愛した大英帝国末期の園芸家の足跡を追ったノンフィクションである。彼、コリングウッド・イングラムは、20世紀初頭に3度来日し日本各地の桜を見物行脚、その種木を移入し自ら交配して種を増やし、英国中に桜を広めた人物だ。

純白の大輪の桜「太白」は、日本

では絶滅種だったが、イングラムが、英国内の知人宅でたまたま枯死寸前の日本からの輸入木を発見、穂木を接木して根付かせ、日本に里帰りさせたものだ。今、太白を日本で觀賞できるのは、多種多様を守らんとしたこの英人桜守のおかげである。

転じて著者は、ソメイヨシノに覆い尽くされた近現代の桜文化に全体主義的な危うさを看取。日英間の捕虜問題の償いとして桜が役割を果たしたとの史実も発掘している。(倉)